選手がそれぞれ持っている、競輪に対する美学
そのぶつかり合いもまた「競輪の美学」

「届きそうで、なかなか届かなくて、もう半分あきらめてたときもあったんですけど、我慢してやってきてよかったです」。

弥彦で3回目、2013年の寛仁親王牌の覇者は金子貴志。デビューして18年目の初タイトル。37歳の彼は優勝インタビューでこう答えて涙した。

愛弟子の深谷知広が逃げて、すんなり金子が抜け出したと記憶してしている人がいるけど、いやいやいや。マーク屋として一流選手の仲間入りをしていた飯嶋則之が「後悔したくないから、深谷君の番手勝負」と、金子に競りにきたのを忘れていませんか。

当日の地元専門紙「スポーツと競輪」の予想は、深谷が本命で、金子と飯嶋は番手の取り合いで脚を使うとみて、3番手を回る浅井康太が対抗。深谷ともうひとりの自力選手・川村晃司に乗る成田和也を3番手の印にして、金子は無印。金子さん、ごめんなさい。

レースは打鐘前から深谷が仕掛けて、飯嶋に踏み勝った金子が3車身離れてこれを追う。追いついたのは最終1コーナー。最後はタイヤ分だけ抜いて、2着は深谷。2車単の配当は5、860円で、21番人気。この2人、最終4コーナーではもう一杯だったはず。残り63・1m、体のどこから、どんなメカニズムで力が湧き出てきたんだろう。

検車場に引き揚げてきた深谷が、何度も「よかった」とつぶやいていたのを記憶している。師弟の絆は競輪の美学のひとつ。そして飯島が、それまでやってきたスタイルを貫いて、一番強い先行選手の番手で勝負したのも、間違いなく競輪の美学。

▽弥彦競輪　寛仁親王牌

世界選手権記念トーナメント

思いつくまま回顧録　第3話

【新潟スポーツ　信氏　忠】